

# イーサポートリンク株式会社

## 効率的な開発リソース管理に着手し 内部統制に対応した環境準備へ

- POINT**
- ソフトウェアの棚卸しを実行し効率的なリソース運用へ
  - プログラムの自動リリースで手作業の非効率性を改善
  - 内部統制に備えオブジェクト本番登録作業の一元管理

### COMPANY PROFILE

設立：2000年  
本社：東京都豊島区  
資本金：連結44億1400万円、単体43億  
6800万円(2008年11月期)  
売上高：24億7100万円(2008年11月)  
従業員数：連結283名、単体271名(2009年5月)  
<http://www.e-supportlink.com/>

### 生産流通のサプライチェーンを ASPサービスで支援

生産者から加工、中間流通、配送、そして量販店まで、野菜や果物などの生鮮流通に携わる各事業者に対して、そのサプライチェーンを一貫して支援するのが、イーサポートリンクの基幹システムである。

同社は青果物生産者や流通各社に対して、主に「システム事業」と「業務受託事業」の2つでサポートしている。

例えば青果物の流過程では各事業者において受発注、入出荷計上、売上・仕入計上、入金・支払消し込みと

いった作業が発生する。特に生鮮品は、損傷や腐敗による返品などが発生しやすく、より煩雑な事務作業が要求される。

そこで同社では、販売・物流管理を中心にした基幹システムをASPサービスで提供し、生鮮流通の一連のデータを一元化することにより、業務を効率的に支援する。これが中核事業の1つであるシステム事業であり、このASPサービスは現在、2009年2月にリプレースしたPower 550で稼働している。現在は青果・花きの流通に関連する企業が利用中だ。

もともとASPサービスの開発プロジェクトが動きだした2001年当初(サービスインは2003年)に、高いサービスレベルが要求されるプラットフォームとして、その信頼性の高さを評価し、iSeries 830を採用した。開発された基幹システムはメインフレーム級規模のオブジェクトが稼働している。プログラム数とデータ量の急激な増加により、ここ数年はパフォーマンスに影響する問題が目立つようになっていた。そこで2007年10月、ソフトウェア資産の棚卸しを目的に導入したのが、「S/D Manager オブジェクト管理(以下、SDM/OBJ)」(アイエステクノポート)である。

「以前はOS提供機能を駆使し、必要な項目を抽出していましたが、手作業のため時間がかかり、オブジェクトの変更や追加を含む状況の変化により、使用状況の把握にも工夫が必要でした。現在は毎朝、SDM/OBJを使って本番環境のライブラリー内容を一覧で取得しているので、毎日のサイズチェック(モニタリング)と本番環境のリソース状況管理およびソフトウェアに関する多くの情報管理の可視化を実現できました」と語るのは、満田康徳氏(SIS本部オペレーションサポート部プロジェクトマネージャー)である。

不要なオブジェクトを調査し、削除することでディスクの圧迫を解消し、リソース効率を高めることにも役立ったようだ。

ちなみにSDM/OBJの導入に際しては、連携してオブジェクトやファイルの相関関係を画面上で参照可能にし、ドキュメントも作成する「SS/TOOL」も同時に導入された。

2008年2月には本番機に続き、テスト/開発機であるi Series 520にもSDM/OBJが導入されている。

### SDM/PRJにより 内部統制に備えた一元管理

続いてオブジェクト(プログラムま



満田 康徳氏

SIS本部  
オペレーション  
サポート部  
プロジェクト  
マネージャー



大木 彰氏

SIS本部  
オペレーション  
サポート部  
部長

たはファイル)の変更管理や本番環境への自動リリースを目的に、2009年5月に導入したのが、「S/D Manager プロジェクト管理 (以下、SDM/PRJ)」である。

導入の直接的なきっかけは、顧客(外資系)の米SOX法への対応に備えたものであるが、同社も今年の会計期(2009年11月)から日本版SOX法に対応するため、来年以降に想定される内部監査に備える狙いもあったようだ。

SDM/PRJは、自動本番登録機能をはじめ、オブジェクト権限設定や履歴管理機能などを備えている。またリモート対応により、本番機だけでなくバックアップ機など複数サーバー間での自動登録も可能である。

同社では顧客から要求されるさまざまな機能追加に対応するため、月間で約100件のリリース件数が発生する。以前は週に2回、夜間に手作業で本番環境へプログラムをリリースしていた。「導入前は作業のベースとなるオブジ

ェクト管理台帳をExcelに手入力していたため、リリース対象ロットに余計なオブジェクトを入れたり、必要なオブジェクトが抜けるといった人的ミスが発生する可能性がありました。しかし現在はSOX法での監査要件でもあるシステム内での台帳管理や各種手続き、本番登録申請書やリリース完了承認といったリリース承認、本番登録ログの管理、モニタリングといった統制および一元管理により、移行漏れは完全に解消されています」と、その効果を語るのは大木彰部長(SIS本部オペレーションサポート部)である。

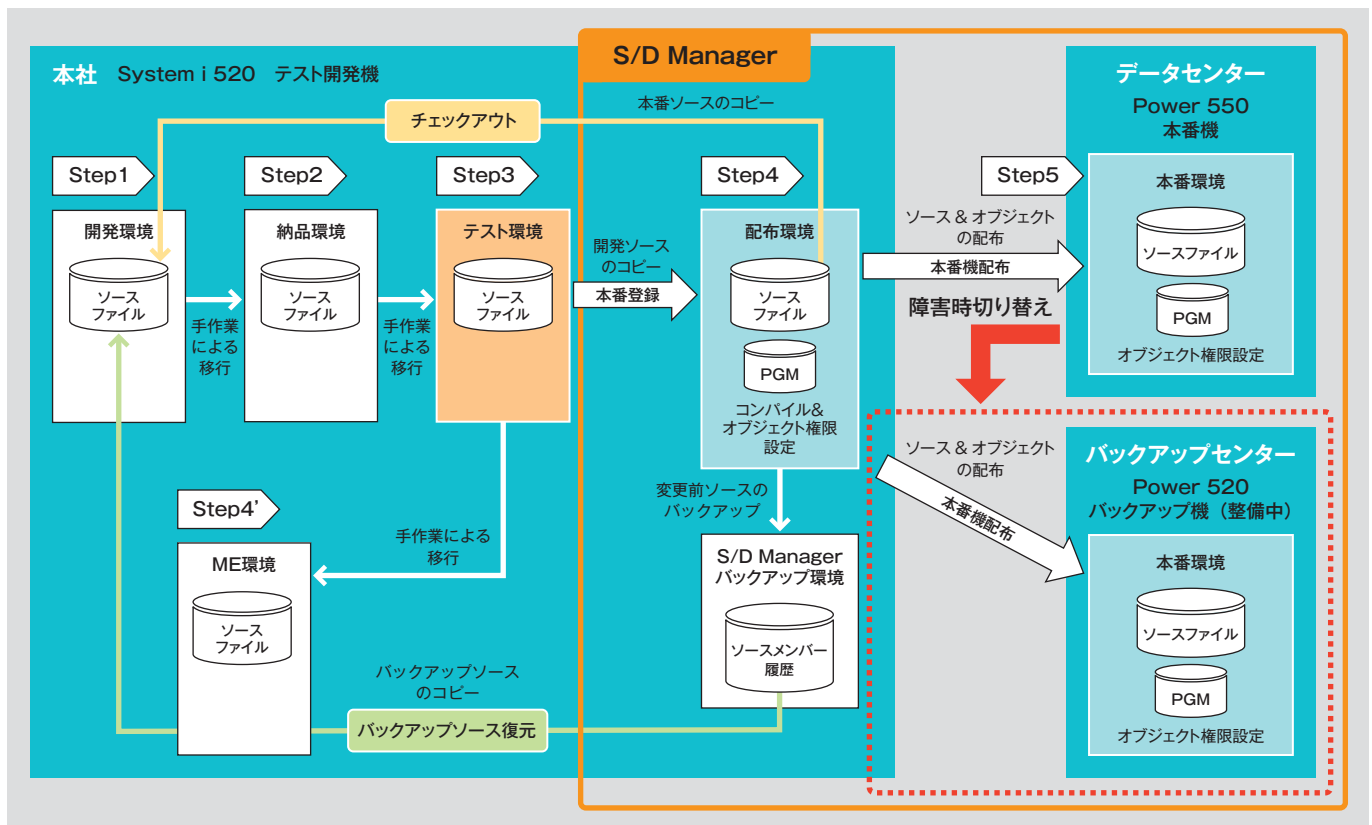
またプログラムが使用されない時間帯に移行できるようになったため、プログラム移行時(本番登録)などに見られたオブジェクトロックも解消された。さらに夜間オペレータの作業軽減および手作業での操作ミスによるオブジェクト権限の不整合なども解消されている。

同社では20名前後の開発者とは別

に、本番環境にアクセスする運用管理に6名ほどの担当者を割り当て、日本版SOX法で求められる開発業務と運用管理業務の厳密な分離を既に実現している。今後は変更管理などにもSDM/PRJを積極的に利用し、内部統制に備えていく計画である。

現在は、SDM/PRJのネットワーク対応版によりテスト開発機であるi Series 520から本番機であるPower 550へ自動リリースを実行しているが、災害対策の一環として、DR機として新たにPower 520を利用し、HAツールおよびSDM/PRJネットワーク対応版を使用したホットスタンバイによるサーバーの二重化体制を整備中である。以前は障害対策を目的に、別のiSeries 830にデータを保全するコールドスタンバイの体制は整っていたが、災害発生時(もしくは障害発生時)に、DR機に切り替える環境を確立し、サービスレベルの向上を図っているようだ。

①



図表 開発リソースの運用管理の仕組み